雑学書庫 知識の記録

近いほどよく出かける、距離減衰

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/20120/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

週末旅行を思い浮かべると、飛行機で12時間以上かかる国より、車で2〜3時間の海辺や近くの隣国が先に思い浮かびます。実際、どの国の海外旅行統計を見ても、近い国々が常に上位を占めています。このように目的地が遠くなるほど訪れる人が少なくなる現象を説明する概念が「距離減衰（Distance Decay）」です。 距離減衰とは、簡単に言えば「二つの場所の間の距離が遠くなるほど、人・物・情報の行き来が少なくなる現象」を意味します。もともと地理学から生まれた概念で、アメリカの地理学者ワルド・トブラー（Waldo Tobler）が1970年に「すべてのものは他のすべてのものと関係しているが、近いものは遠いものよりも強く関係している」とまとめた地理学の第一法則とつながっています。観光学では、1979年にGreerとWallが、距離が観光需要に与える影響を初めて扱った研究者として挙げられます。 本資料では、距離減衰の基本原理、図で見る減衰曲線と主な用語、国際観光統計に見る実際の姿、そして活用と限界まで順に見ていきます。 遠くなるほど減る足取り、距離減衰 1. 距離減衰の基本原理人がどこかへ出かけるかどうかを決めるとき、距離は常にコストとして働きます。遠くへ行くほどお金や時間、手間がかかるため、ほかの条件が同じなら近い場所のほうがよく選ばれます。 （1）距離の摩擦地理学では、距離が移動を妨げる力を距離